

# 非言語コミュニケーションを考える

—— 「遠慮」のはたらく世界 ——

大野 佳代子 (英文学)

## はじめに

土居健郎によれば日本人の場合、内と外の生活空間は三つの同心円から成っており、遠慮が必要な人間関係を中間帯に置くと、その内側には遠慮の必要のない身内の世界、外側にはそれとは違った意味で遠慮の必要がない他人の世界が位置するという<sup>1)</sup>。遠慮の必要のない人間関係の世界が中間帯を挟んで内と外に存在するわけである。いま仮に、三つの同心円の一番内側の世界を (A)、中間帯を (B)、一番外側の世界を (C) とすると、この同心円の中心にいる個人は、(A) に属する人間に対しては、「甘え」の心理が働くことによって遠慮をする必要がないと考えるが、(C) に属する人間に対しては、その人間が彼にとって、いわばまったく無縁の、存在しないも同然の人間であるために、遠慮をする必要はないと考える。

しかし近年、本来遠慮を必要とするはずの (B) の範囲は狭まりつつあるように思われる。土居の言う、「無視ないし無遠慮の態度が取られる」<sup>2)</sup> (C) の範囲が、人々の意識のうえで以前に比べ拡大していつている一方で、従来ウチとソトという意識によってきちんと区分されていた (A) の領分が、なし崩し的に (B) の領分を侵蝕しつつある。

この点を、女性の装いや常識・マナーの面から考察してみたい。

### 1) 「自由」とは

学生と社会人とでは何が一番違うと思うかという問いに対して、多くの学生が「自由」と答える。現在のような長期にわたる不況の時代には、経済的な事情からアルバイトを余儀なくされる学生の数は以前に比べてはるかに多く、事実上彼らの「自由」の範囲は大いに狭められて

いるのであるが、それでも、「束縛されている」という実感は社会人とは比較にならないと彼らは言う。「就職したらこんなことはもう出来ない」とか、「こういうことは学生のうちだけ」という表現は、そのことを端的に示す一例である。では一体、彼らの言う「自由」とは、具体的にどのようなことをさしているのであろうか。

昨今の学生の間には、「タメグチ」と呼ばれる独特の言語表現があると言われている。上述の、学生と社会人とでは何が一番違うと思うかという問いに対する、学生の答えの一つが、この「タメグチ」であった。社会人になると言葉遣いに気を配らなければならないから、大変そうだと彼らは言う。「タメグチ」で会話ができることは、彼らにとって「自由」であることの大きな要素なのであろう。

さらに、服装や髪型など「装い」も、「自由である」と感じるかそれとも「束縛されている」と感じるかの、大きな心理的分岐点となるようだ。この場合、「自由＝束縛がない」と考えられよう。つまり、周囲の人間に対する配慮や遠慮をすることなく、自分の勝手気ままに装うことができるという点で、学生と社会人は決定的に違うというわけだ。

求職活動を始めるときに、学生は装いを通して社会人なるもののイメージを、恐らく初めて具体的に実感する。リクルート・ファッションという言葉が示すように、5～6月頃の学内には「あ、今日は会社訪問のようだな」ということが、一目で見て取れる装いの学生が目立つ。近年は服装のみならず髪の毛の色も変わることが多い。会社訪問のために臨時に変えるのであるから、こまめな学生になると、昨日、今日、明日と、会うたびに髪の毛の色が変わっていき

服装は無論のこと、とくに髪の毛の色に象徴されるように、外見を変えることによって、彼女たちは気持ちの持ちようを変えようとしているのであろうが、はたして生身の人間の精神的な部分が、そんなにも都合よく変えられるものであろうか。それとも、現代の若者の内なる意識は、外見を変えれば容易に変え得るものになりつつあるのであろうか。

近年、以前は社会の常識であったことが、だんだんそうでなくなっていく現象が、若者ばかりでなく30代、40代の人々の言動にも散見されることが多くなってきたように思われる。とくに「装い」の面では、その変貌には目覚しいものがある。

## 2) 「装い」の変貌と女性の意識の変化

リクルート・ファッションに身を包み、髪の毛の色をもとに戻し、緊張の面持ちで会社訪問に出かける学生の姿に見られるように、「装い」も先述の三つの同心円に関する区別意識を顕著に示すものである。

いまの時代、髪の毛の色を変えて楽しむことは、もはや当たり前のこととして社会に受け入れられており、以前は海辺でしか着用を容認されなかったような、きわめて露出度の高いデザインの服装が街中に氾濫している。性的被害の増加が話題になると、必ず被害者側の服装を問題視する意見が出てくるほどだ。ファッションに関して、世の中全体がかくも寛大になったのは、ここ20年ほどのことではないだろうか。

1956年に発表された『経済白書』の「もはや戦後ではない」という一文が示すように、1957年には「三種の神器」(白黒テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫)が流行語になるほど、生活の電化のスピードは速く、人々の生活も大幅に改善されていった。装いの面でも、一世帯当たりの衣料所有数量と増加率を見ると、1959年から1964年にかけては、婦人服は74.4%という突出した増加率になっている<sup>3)</sup>。この現象は、和服から洋服へという転換期と重なったためもあるが、家事の電化により余剰時間を持つようになった女性の意識が、家の外に向けられるようになったことをも表している。

団塊世代の服飾動向に関する村田仁代の報告によれば、1960年代半ばには既に本格的な洋服生活に転じていた人々は、1970年代に入るとファッションに対して、従来の「他者と同じもの」ではなく、「自分と他者の違いを主張できるもの」を求める傾向が強まり、「組み合わせファッション」という流行が生まれたという。どのように組み合わせるかは個人の趣向に委ねられるという、その基本的な考え方は、今日にまで継承されているということである。

「組み合わせファッション」において、個人が他者との違いを追い求める傾向は、デザインばかりでなく、次々に新しく生み出される素材の面でも、見られるようだ。

1950年代前半に日本で初めてナイロンの生産が開始されて以降、種々の化学繊維が開発されるようになるとともに、女性の「装い」に関する意識は急速に変化していったようである。本来他者の目に触れるものではなかったはずの下着までもがファッションの仲間入りをし、1963年のセパレーツ水着の出現が示すように、1960年代前半には「肉体を見せることが恥ずかしくなく」<sup>4)</sup> になっており、やがて60年代後半には、ミニスカートが全盛となる。初めてミニスカートが登場したとき、おおかたの予想は大流行はしないだろうというものであったという。ところが憤み深いとされていたはずの当時の女性は、若年層どころか壮年の女性までもが、こぞってミニスカートをはくようになり、「あし」を大腿部まで人目に晒すことへの羞恥心は何処かへ消えてしまった。

昔の日本社会では和服の色・柄は、身分、年齢、未・既婚などによって、確定していたという<sup>5)</sup>。洋服社会に移行してからも、以前は、例えば素材一つを取ってみても、かなり厳密なファッション観が社会全体に浸透していたようである。女性の衣服に限って言えば、素材としては夏物・冬物のほかに、合いの物があり、更に合い物は素材面では変わりがなくとも、色・柄の点で、春物と秋物とに分かれていた。季節と素材をマッチさせるという、このような衣服に関する素材の峻別は、おそらく時代を遡ればますます厳密であったと思われる。

少なくとも30年位前までは、素材と季節とはしっかりと結びついて、人々のファッション観を形成していた。ウール素材のものは冬服、綿麻素材のものなら夏服、というように。素材だけでなく、デザインも然りである。冬には出来るだけ身体を覆うようなデザインにし、暑い夏場は露出度の高い涼やかなデザインのことを、といった具合である。

以前(1988年)、ハワイを訪れた時のことである。大学のキャンパスで行き交う人々の服装はまちまちであった。3月であったが、常夏の国と言われる地でのこと、大体似たり寄ったりの服装であろうと勝手に思いこんでいたため、目に入った光景にはかなり戸惑った。当方の目には完璧に真冬の装いという印象の、厚手の長袖のセーターを着込み、たつぷりとした長めの厚地のマントの裾を翻して行く、アフリカ系の人がいるかと思えば、その傍らを超短パンに上半身は必要最小限身体を覆っているだけという格好の、若い女性がさっそうと歩いて行く。みな、思い思いの服装である。要するに、自分が一番快適だと思う服装でいるのだ。他人の目を気にして、少々寒くても我慢するとか、暑いのを我慢するとかといった、余計な斟酌は一切しない。他人に迷惑をかけなければ、すべて自分の責任で自分のしたいように振る舞ってよい、というコンセンサスがそこにはあった。単純明快で、何と居心地の良い社会だろうと、そのとき思ったものである。

当時のわれわれの環境では、「衣替え」的発想がしみついていて、〇〇の季節だとこの格好はおかしいとか、こういう服装でなくては、とかが衣裳選びの基準であった。自分の快適さよりも、傍目にどう映るかが優先した。であるから、ハワイでの人々の服装に対する自由な考え方は、非常に新鮮なものに映ったのだ。

かつて、日本人は大いに傍目を気にして生きてきた集団であった。ここで言う「傍目」とは「世間の目」と言ってもよい。「世間」とは、もともと(C)に属するはずの赤の他人が、(B)に取りこまれたものである。その他人の思惑を、日本人は必要以上に気にしていたのである。(B)に対して、われわれ日本人は細心の配慮をしつ

つ繊細な人間関係を構築してきた。「本当は〇〇をしたいのだけれど、ヨソのヒトから見たらどう思われるか」という懸念が、自分の行動にブレーキをかける。「いい年をして、恥ずかしい」とか、「〇〇らしくしなければ、いけない」とかいった言葉は、いずれも「傍目」を念頭に置いた表現である。言葉遣いはもとより、着装にも大いに世間の目を意識した配慮をしたのである。

しかし、これも今は昔となりつつあるようだ。昨今のように、薄手とはいえ見るからに毛糸で編んである半袖や袖なしのセーターで、しかもタートルネックとなると、一体このセーターは、いつ着るものなのだろうかと、想像を絶する。しかし、斟酌は無用とばかり、若者は着たいときに、着るようである。冬に着ている者もいれば、真夏に着ている姿を目にすることもある。傍目にどんなに寒そうに見えようと、暑苦しそうであろうと、当人は一向におかまいなしである。

日本人は(C)に対しては、「旅の恥は掻き捨て」という表現に象徴されるように、他人は路傍の石のごとき存在として、概ね無遠慮に振舞ってきたようである。しかし近年人々の意識のうえで、この(C)は以前より範囲が広がってきているのではないか。換言すれば、(B)の範囲がかつてに比べ、ずっと狭くなっているように思われる。

もともと同心円の最外側である(C)は、自分とは無縁の石ころである他人に対して、配慮する必要はまったくないという考えが罷り通っている世界なのであるから、個々の人々の意識のうえで(C)の範囲が広がると、傍若無人の振る舞いやマナーの欠如は、今後ますます多く見られるようになるであろう。

### 3)「ナマ足」のメッセージ

近年、夏場には、街中でストッキングを着用していない女性の姿が、非常に多く見受けられるようになった。ストッキングの着用に関する人々のこのような意識の変化は、(A)と(B)及び(C)の世界の範囲が近年変わりつつあることの、一端を示しているのではなからうか。

従来、女性にとってストッキングとは、外出の際の必須アイテムの一つであった。高音多湿の日本の夏にあって、ストッキングを身につけることを、煩わしいと感じる女性は少なくない。汗でべとつく肌に、ストッキングをはくなど、うっとうしいことこのうえない。素足の方がはるかに快適なのだ。できることなら、一日中ずっと素足でいたいと、誰しも思う。しかし、外出するときには、そのストッキングをはく。それによって、家にいるときの寛いだ気分をきっぱりと切替えるのである。これからソトの世界へ出て行くのだというメッセージが、ストッキングから身体中に発信されるのだ。

ところが、そのような役割を担っていたストッキングを、夏場は着用しないという人が増えてきた。ソトのために一時、うっとうしさを我慢するということを、もはやしなくなったのだ。いわゆる「ナマあし」という言葉で表現されたこの現象は、一時期流行としてマスコミに取り上げられたが、いまや若年層はもとより中高年にまで、あたりまえのこととして定着しつつあるようだ。

「ナマ足」という語が出現したのは1990年代後半のことである。この言葉をはじめて耳にしたとき、少なからぬショックを受けたものだ。まずは、その語感の不愉快さが挙げられる。「すあし」という言葉から受ける印象とは程遠い。次に、おのれのナマの足を人目に晒すことに対する抵抗である。以下、この2点について考えてみたい。

まず、語感について。せっかく「素足」という響きの良い言葉があるのに、何故「ナマ足」などと言うのかという困惑の声はよく耳にする。「気持ちが悪い」という声もある。「ナマ」という語感は何故好ましくないのだろうか。

接頭語としての「なま」には、次の3通りの使い方がある<sup>6)</sup>。

- ① 名詞について、十分でない、いいかげんなものであること、未熟なものであることを表す。
- ② 形容詞・形容動詞について、なんとなく、少しなどの意を表す。
- ③ 動詞の連用形から転じた名詞について、

それが中途半端である意を表す。

①の例としては、生返事・生兵法・生あくびなど、②の例には、生易しい・なまぬるい・生暖かいなど、さらに③の例としては、生煮え・生乾き・生殺し・生焼けなどがある。いずれの場合にも、いいかげんであるとか、中途半端であるとか、比較的マイナスのイメージを伴っている。

見逃せないのは、「なま」がついたことによって、「いやな」感じが加わることがあるという点だ。具体的な例を次に示そう<sup>7)</sup>。(但し、傍線は筆者)

- ① 生汗：緊張した時などにじわじわと出てくる、いやな感じの汗。
- ② 生新しい：その事件などが起こってからまだ時間がたたず、いやな印象が薄れないでいる。

また、生首や生傷は、これらの言葉を聞いただけで真っ赤な血が滴り落ちる様や、皮膚が擦り剥け血がにじんだ痛々しい様子が目に浮かぶ。生爪も語の意味は、「人の爪のうちで、指に密着していてみだりに切ってはいけない部分」であって、別にどうということはないのであるが、実際の運用場面では「生爪をはがす」という使い方をするために、この言葉には、「痛っ」という思わず眉をしかめたくくなるような連想が伴う。「ナマ」という語感に対する好ましくない印象は、上述の事柄によりもたらされるのであろう。

次にナマの足を人目に晒すことに対する抵抗感について、考えてみよう。この場合の抵抗感とは、羞恥心と言い換えてもよいであろう。羞恥心というものは、人間誰しも、いつの時代であつても、持っているものである。ただ、羞恥の対象となるものが、時代によって、あるいは個人によって、異なるだけなのだ。井上章一は羞恥の対象が時代とともに変わっていく様を、詳細に紹介している。彼は女性がパンツをはくようになったのは、1932年の白木屋の大火がきっかけであるという説を否定し、そもそも当時の女性はパンツをはいていない下半身が人目に晒されることに対して、羞恥心を抱くことはなかったのだと、論証する。それを恥ずかしく

思うのは、現代のわれわれの感覚なのだと。女性たちはむしろパンツをはくようになったことによって、下半身が人目に晒されることに羞恥心を抱くようになったのだと、彼は言う。

一般的に、人が衣服を身につける目的は、慎みと、装飾と、保護／実用であるとされている。S. B. カイザーは、最古の衣服着用説は慎みによるものだという説に言及し、慎みは社会的に学習されるものであって、本能的なものではないのであるから、人々の着装行為を慎みという点だけから考察するのは危険であると言っている。慎みの基準は文化や時代や状況によって異なるのだと、彼は言う<sup>8)</sup>。例えば足首の露出は、19世紀のアメリカの、ビクトリア朝時代風の女性にとっては、エロティックなことと受けとめられていたという<sup>9)</sup>。足首を露出するということは、羞恥を覚える行為であったのだ。

足首を露出することも、パンツが見えることも、まさに、文化や時代や状況によって、羞恥の対象になったり、ならなかったりする。

#### 4) 足(の指)の露出と羞恥心

中国では、女性の「足」に対して、特別な見方がされていた時期があった。纏足という風習がその顕著な例である。纏足の起源については紀元前であるとするものを含め諸説あるが、概ね南唐(937~975)の終わり頃とする説が有力であり、この悪しき風俗はその後1000年近くに渡って、「3寸金蓮=きわめて小さな纏足に対する美称」として女性美の基準であり続けたと言われる<sup>10)</sup>。清代末に人々の女性観が大きく変わるまで、纏足は「男子に媚びを売るため」<sup>11)</sup>の一つの陋習として女性の間で行われ続けたというが、幼少時に3年から6年くらいかけて施した纏足により、「女は杖を使うか、人に支えられでもしなければ歩くことが出来なくなる。しかもそれも、「左右へふらふらと揺れながら危なっかしい歩き方」<sup>12)</sup>しか出来ないのだ。

竹内久美子はこの纏足状態を、「天然のハイヒール」であるとみなし、ハイヒールをはいた女性の足がエロティックであるのと同様に、「纏

足の足は、それ自体がハイヒールとなることで強烈なエロスを放つ」<sup>13)</sup>と言う。彼女は女性の足の発するセックスアピール度がきわめて高いことに着目し、証拠不足だとしながらも、「女の脚を見ることは、彼女の生殖器を見るに等しい」<sup>14)</sup>という推論を述べている。

脚もさることながら、つま先(=足の指)があらわになることに対して、かつて日本人はひどく羞恥心を抱いていたと思われる。足は人の目から隠しておかなければならぬ、汚い部分だという意識が、日本人にはあったと、水野潤一は言う<sup>15)</sup>。水野はそれを“foot-complex”と表現しているが、この場合の羞恥は、次のような事例<sup>16)</sup>に見られる、日本人の感性と一脈通じるところがあるように感じられる。

- i) あるアメリカ人の家庭を訪れた折、そこのダイニング・キッチンで使っていた台ぶきんのようなものは、なんと子供のおむつの古いのを縫いあわせたものだった。吸水性がよく、そして惜しげがないとのこと。いうまでもなく真っ白だった。しかしいくら白くても、日本の家庭ではあまりそういうことはしないのではないだろうか。
- ii) 昔の日本のある地方では、洗濯物を乾すのに、男竿、女竿の区別をして、女竿はかならず男竿より低いところにかける習慣があった。あるいは帽子をまたがないとか、顔を拭く手拭としもを拭く手拭とを区別するとか…

つまり、かつての日本人は「隠しておかなければならない=あらわになったら恥ずかしい」という感情を、上記のように生活のさまざまな場面で抱くことが、日常的であった。清潔であるとか、衛生上問題がないとか、そのような事柄とは異なったレベルの、発想であり、その結果生じる羞恥である。

「ナマ足」について現在の女子学生がどのように感じているか、アンケートをとってみた。対象は短大の1・2年生128名である。自分がナマ足であることに対して、「いいと思う」と回答したのは66.4%、「あまり好きじゃない」は6.3%、「考えたことない」は27.3%であった。ナマ足を「いいと思う」と肯定する理由は「快適である」や「さわやかだ」が大半で、「その方が衛生的だから」とする者もいた。「あまり好きじゃない」と回答した8名の理由は、「恥

ずかしい」が6名、「気持ち悪い」が2名であった。ナマ足肯定派は他人のナマ足に対しても、同様の理由で肯定的であり、自分がナマ足になることを「あまり好きじゃない」と回答した8名も、他人のナマ足に対してはそのうち5名が「快適そう」だとか「さわやかそう」で「いいと思う」としている。残りの3名は、他人のナマ足でも「見苦しい」から「あまり好きじゃない」と回答している。

「恥ずかしい」と回答した者は少数であったが、もし同様のアンケートを高齢者に対して行ったなら、この数はもっと増えたのではないだろうか。詳細なデータはないが、筆者の周辺では、50代半ば以上の女性で、自分のナマの足、とくに足の指先を人目に晒すことに対して、なんとなく居心地の悪さを感じるという者は少なくない。要するに羞恥を覚えるというのだ。少々大袈裟であるが、まるで自分の裸身を見られるような気がして恥ずかしいと、言う者さえいる。先に紹介した竹内の、「女の脚を見ることは、彼女の生殖器を見るに等しい」という推論が実証されれば、この羞恥は少しも不思議ではない。

ごくわずかな数のアンケート結果ではあるが、ソトに対する「遠慮」の意識を働かせることなく、「快適だ」とか「爽やかだ」という自分の満足度を重視し、他人にもその尺度をあてはめている者の多いことが分かる。ナマという語感に対する抵抗は別として、昨今の風俗を見る限り、足（の指）の露出に対して羞恥心を抱く女性はもはや少なくなったようである。かつてミニスカートが登場したとき、脚を大腿部まで人目に晒すことに対する羞恥心が、いつのまにか消えてしまったように、このまま足の露出は定着していくのであろう。

##### 5) 変わる常識とマナー

この20年から30年余りの間に、我々をとりまく生活環境は急激に変貌し、それとともに日本人の意識も大きく変わりつつあるようだ。とくに長幼の序列意識は、「イエ制度」の崩壊とともに、日常生活の中から急速に失われつつある。風呂好きと言われる日本人の「入浴」を例

にとり、序列意識の消失とともに変わりゆく、常識・マナーについて考えてみたい。

数年前、新聞紙上で50代の女性読者からの次のような投書を見た。ある温泉での不愉快な出来事についてである。曰く、

近頃の若い人は風呂の入り方も知らない。ガラッと戸が開いて、どやどやと数人の若い娘さんが入ってきたかと思うと、次々にそのまま湯船にぎぶんさぶんと入ってきて、大声でキャッキョと騒いでいる。見かねて、こういう時はせめて前ぐらい洗ってから入るものだとしなめたら、「何よ？この人。変なおばさん。あなたのお風呂じゃないでしょつ、余計なお世話よ。」と逆に怒鳴り返されてしまった。

このようなことは以前は家庭でちゃんとしつけられていたはずなのにと、この女性は憤慨する。彼女の慨嘆の中身は大きく二つに分けることが出来よう。一つは若い女性らの非常識な振る舞いについてであり、もう一つは家庭で躰がきちんと言われなくなったということに対してである。

入浴するに当たって、何が常識で何がマナーかということは、なかなか区別するのが難しい。英語では常識＝コモン・センスであるが、OALDによれば、common sense: practical good sense gained from experience of life, not by special study であり、一方マナー・エチケットについてはこうである。manners: social behaviour, etiquette: formal rules of correct and polite behaviour in society or among members of a profession. つまりマナー・エチケットというのは、周囲の人に迷惑をかけない・不快感を与えないように振る舞うことなのである。

上述の定義によれば、入浴の際の脱衣は常識であり、湯船に入る前に前を洗い身体の汚れをざっと洗い流すことは、マナーであるということになる。「余計なお世話」と言い放った若い女性と、憤慨する50代の女性とではそれぞれの常識とマナーの中身にズレがあることが分かる。50代の彼女にとっては、湯船に入る前に自分の身体の前を洗うということは、マナーというよりもむしろ常識であったと思われる。そ

れは、共同利用の温泉であろうと個人の浴室であろうと、周囲に人がいようといまいと、そのようなことに関係なく行われるべき、入浴の際の常識であったのだ。ところが、若い女性たちにとってはそうではなかった。おそらく若い彼女たちにとっては入浴に際して衣服を脱ぐのは常識だが、湯船に入る前に「前」を洗うという事は、思ってもみなかったことなのであろう。まして、そんなことに目くじら立てて咎めだてをされるなんて、「余計なお世話よ。変な人」ということになる。

このような常識・マナーの変化には、風呂を備える家庭が増えたことによる銭湯の急速な減少が、大きく影響していると考えられる。岐阜県<sup>17)</sup>の場合、調査が実施された1950年以降の、県下全域における公衆浴場(普通)の数の推移を見ると、1950年はその数が297であったのが、1969年には最多の387に達している。しかしその後は減少の一途をたどった。減少率をもっとも大きかったのは1977年で、前年比35.6%減という状況であった。この傾向は岐阜市の場合も、概ね一致している。岐阜市では公衆浴場(普通)の数が最も多かったのは1972年の157であったが、減少率のピークは県と同様、1977年で前年比48.3%減であった。

ほとんどの家庭が銭湯を利用していた時代には、銭湯はマナーを身につける絶好の教育の場であった。親ばかりでなく、無関係な周囲の年長者もこの教育には何らかの貢献をしたはずである。ところが、各家庭に風呂が設備され、さらにシャワーが登場してくると、状況が一変したことは、見てきたとおりである。

銭湯の減少率をもっとも大きかった、この1977年という年をあらためて振りかえってみると、膨れっ面の不機嫌な若者が増加したというアメリカと同様、日本でも不機嫌の時代になったという記述<sup>18)</sup>が目につく。

道行く人々が挨拶しあつた小さなコミュニティの時代、ゲメインシャフト(共同社会)が遠い昔となりゲゼルシャフト(利益社会)の時代に完全に突入し、日本社会も不機嫌の時代に。

1977年という年は、公衆浴場の激減が象徴するように、常識・マナーという観点からみた

とき、日本人の意識の変化のうえで一つの大きな転換点であるのかもしれない。

以前(1996年)、風呂の入りに関して100名ほどの学生にアンケートをとったことがあった。興味深かったのは「入浴の順番」についての意見であった。「入浴の順番」についてのアンケート結果が、この小論を書くきっかけとなったのだが、日本の家庭において、過去連綿と引き継がれてきた「風呂に入る順番」の鉄則は、いつのまにか疾に姿を消していた。鉄則であるから、昔(今の70代・80代の人々が壮年期の頃まで)は比較的きちんと守られていた。その後徐々に崩れていったようである。

「順番がはっきり決まっている」・「暗黙のうちに大体決まっている」と回答したのは40%であったが、その詳細を見ると、この場合の「順番」は必ずしも長幼の序列に従ったものではなく、あくまでも個々の家族の都合上、自然と出来あがつたものも含まれていた。しかし、祖父母と同居の家庭では、祖父母が一番先に入浴するという回答が目立った。また、両親と祖母、兄、姉と弟という7人家族の学生は、幼い頃はきちんと決まっていたと言う。その順番はこうである。①父親②兄又は弟③祖母④本人又は姉⑤母親。かつては徹底的に男女と長幼の序列が守られていたことが分かる。さらに、母親の実家では男が先だったので、母親は父親を先に入浴させたが、父親が嫌がったため結局順番はないと回答した者もいた。このアンケート実施から7年後の今では、「風呂に入る順番」の鉄則が消失してしまっている家庭は、もっと増えているであろう。

これには、なんと言ってもシャワーの普及が大きく影響している。19世紀後半にイギリスで医療器具として開発されたシャワーは、その後欧米で急速に発展し、日本に輸入されたのは1887年のことだという。1950年代後半に現在のようなハンドシャワーが登場したことにより、一般家庭で普及するようになった<sup>19)</sup>。考えてみれば、シャワー式入浴法の欧米には「入浴の順番」などというものはないのが当たり前で、この「順番」はきわめて旧日本的なものであると言える。

## おわりに

ウチとソトを区別する意識は、人々の間から徐々になくなりつつあるように思われる。女性のストッキング非着用の例ばかりではない。本来仲間内だけの言葉であるはずの、若者の「タメグチ」は、「ウチ」=同心円の(A)、という枠を乗り越えて、中間帯である(B) = 「ソト」の人に対しても使われるようになってきている。また、本来のスポーツ用という目的から離れて、在宅時に寛ぐためであったり、家庭での作業着として着用され始めたトレーニング・ウェアが、外出時にも着替えることなく、そのまま着用されるという現象もいつの頃からか見られるようになり、今ではすっかり定着しているようだ。

これらの現象はいずれも、近年人々の意識のうえで、遠慮をする必要のない(A)がズルズルとなし崩し的に、遠慮をしなければならないはずの(B)に入り込んできていることを、示すものである。さらに一方で、今までに見てきたように、もともと無遠慮な態度が容認されていた(C)は、その範囲が拡充されつつある。

塩谷壽翁は「変容する個と家族」を論述する中で、「ホテル家族」と題する記事(2000年6月掲載)に出会ったことに言及している。「ホテル家族」とは、「食事さえも個人個人が別べつにとるような家族」で、「めいめいが自分の好きな時に好きなものを自分の部屋で食べ」、家族のそれぞれは別々に「社会とつながっている」のだという<sup>20)</sup>。

このような形態をとる家族の場合、他者をも含めた人間関係において、どの範囲まで、どの程度に、遠慮が働くのであろうか。大いに興味を惹かれるところである。「カラスの勝手にしょ」という言葉が、「ドライで、エゴイスティックで、自己主張もあり、ちょっぴり反抗的」<sup>21)</sup>な若者にぴったりだとして流行語となったのは、1980年のことであったが、「勝手に」の範囲はその後ますます広がったのであろうか。

和田秀樹は、「甘え」る能力が、今の日本社会には欠如していると言う。終身雇用という制度の見直しや年功序列に対する批判により、企

業マネジメントを欧米型に転換した会社は少なくないが、期待されたような効果が得られず、むしろ従来型の従業員の雇用を守るという形を踏襲している会社の方が空前の利益をあげていることを例証して、彼は日本人がかつてのような「甘え」の心性を取り戻したら、今の日本社会が抱えている病理は改善されていくのではないかと提言している<sup>22)</sup>。

甘える側と甘えられる側という、両者のあいだに信頼関係がないことには、「甘え」は成立しない。「人間関係において相手の好意をあてにして振舞う」<sup>23)</sup>行為は一方的になされるものであってはならない。相互に甘えるということが、大前提となっているべきだ。この、互いに相手の「甘え」の存在を容認するということが、常識という言葉で表される言動に、結びついているのではないか。

日常生活の様々な場面から長幼の序列意識が消失し、常識やマナーの中身が変わる一方で、(A)と(C)ばかりが広がり、(B)がどんどん狭くなっていく今日、はたして、われわれは和田が言う、かつてのような甘える力を取り戻せるのであろうか。「甘え」が成立する人間関係を築けるのであろうか。

現代の社会はあまりにも「なんでもOK」でありすぎるように思われる。個人の自由を主張するのは悪くないのだが、自分の自由しか見ていない。自己主張に徹するあまり、他人への配慮に欠ける、そのような人間が増えつつあるように感じられる。

## 注

- 1) 土居健郎、『「甘え」の構造』第3版、弘文堂、平成5年、38-43頁。
- 2) 同上書、43頁。
- 3) 神山進(編)、『被服行動の社会心理学』北大路書房、1999年、140頁。
- 4) 祖父江孝男、杉田繁治(編)、『暮らしの美意識』ドメス出版、1984年、246-254頁。
- 5) 日本社会心理学会(編)、『生活様式の社会心理学(年報社会心理学第16号)』勁草書房、1975年、25頁。
- 6) 『大辞林』第2版、松村明(編)、三省堂。
- 7) 『新明解国語辞典』第2版、三省堂。



- 8) S. B. カイザー著、被服心理学研究会訳、『被服と身体装飾の社会心理学 上巻』北大路書房、1994年、35頁。
- 9) 同上書、38頁。
- 10) 夏曉虹著、清水賢一郎・星野幸代訳、『纏足をほどこいた女たち』朝日新聞社、1998年、18-38頁。
- 11) 同上書、168頁。
- 12) 竹内久美子、『シンメトリーな男』新潮社、2000年、95頁。
- 13) 同上書、96頁。
- 14) 同上書、100頁。
- 15) 水野潤一、『マル社会の日本人』改訂新版、研究社出版、1987年、54頁。
- 16) 大丸弘、『衣・きもの一畳の上の美学』『暮らしの文化人類学』PHP研究所、1984年、45-46頁。
- 17) 岐阜県発行、『衛生年報』(昭和25年発刊)より。
- 18) 室伏哲郎筆、『ニッポン風俗・芸能グラフィティ』自由国民社、2003年、92頁。
- 19) e-日研：ニュース/2001/3/16
- 20) 塩谷壽翁、『異文化としての家』圓津喜屋、2002年、415頁。
- 21) 『現代用語20世紀事典』自由国民社、1998年、115頁。
- 22) 中日新聞(夕刊)、2003年9月22日。
- 23) 土居健郎、『続「甘え」の構造』弘文堂、平成13年、65頁。

#### 参考文献

- 村田仁代、『団塊世代の着装観』前掲『被服行動の社会心理学』。
- 柳洋子、『衣服美の変容過程』前掲『暮らしの美意識』。
- 井上章一、『パンツが見える』朝日新聞社、2002年。
- 『imidas'97』集英社。